

# 戒名の内容？

仏教徒として生前に仏様と血縁し、心安らかな日々をおくるために授かるものなのです。本来は生前に仏様と血縁し、戒名を授かるのが良いのですが、仏縁がなく、亡くなってから授かる人が多いのです。

元々の戒名というのは二文字で、生前の名前である俗名から一文字、仏典から一文字取ってつけるというのが一般的でした。しかし、現代においては戒名の前後に院号や道号、位号などが付帯し、4つで構成され、それら全体を戒名と呼んでいます。

最近では『戒名大辞典』という書籍や『法名戒名作例大辞典』というCD-ROMも発売されており、僧侶も参照しているといえます。戒名に使用出来ない文字というのは基本的にはありませんが、なるべく使わない方が良く、戒名に適さないであろう文字は存在します。そんなに難しい決まりはありませんから、常識的に見てイメージが良くない文字や表現、難字や奇字を避ける程度で良いのです。

「〇〇院 × × △△居士」という戒名の例を見てみましょう。まず「〇〇院」が「院号(印伝号)」であり、その次にある「× ×」が道号、さらにその後の「△△」が戒名(法名・法号)、最後の「居士(大姉・信士・信女など)」が「位号」と呼ばれるものです。通常、戒名といえばこの全体を意味しますが、元々の戒名は位号の前にある漢字二文字のみであり、その他は社会的な地位や財力を表す修飾文字になります。つまり、文化的な都合でふ化されるようになったものなのです。

## ■ 「院号」

当初は皇族のみに許される最高位の称号でした。時代の流れに沿って、皇族でなくとも私財を投じて寺院を建立するなど大きな貢献を残した人にも授与されるようになりましたが、それでも一国の大名や家老以上の身分でないと適いませんでした。ところが、現在では寺院の運営に貢献した人や社会的に偉大なる業績を上げた人、もしくは金品の寄贈などがあった人などに広く授与されるようになっています。

なお、院号よりも上位の呼称として「院殿号」がありますが、これは足利尊氏が「等持院殿」と称したことが起源と言われています。元々は院号に次ぐ称号でしたが、現代においては字数が多いところから、院号よりも上に位置付けられています。当初は文字通り殿様や大名にだけ授与されていたが、現代に置き換えれば首相や大臣経験者、大企業の社長などがそれに相当し、実際にこういった人達の多くが「院殿号」を与えられています。

## ■ 「道号」

戒名の上につけられる称号。生前の人柄や職業、趣味、特技等をイメージさせる文字を用いることが多く、例えば作家など執筆活動を行っていた人の場合には大部分が「文」の字を当てています。

元々の道号は中国で使われていた尊称で、主に仏教を修得した高僧に授けられるものでした。

## ■ 「戒名(法名・法号)」

「〇〇院」から始まり「居士(大師・信士・信女など)」で終わる一連の文字を「戒名」と呼ぶことが多いですが、本来の戒名はこの2文字のみでした。前述の通り、生前の俗名から一文字、仏典から一文字取ってつけられます。

## ■ 「位号」

戒名の下につけられるもので、仏教徒としての階級を意味します。性別や年齢で称号が変わり、男性の場合には「信士」「居士」「院居士」、女性の場合には「信女」「大姉」「院大姉」などがあり、児童や未就学児には「童子」「童女」(7歳～15歳程度)、乳幼児には「孩子」「孩女」(2歳～6歳程度)、「嬰兒」「嬰女」(0歳～2歳程度)がつけられます。なお、流産・死産した子につけられるのは「水子」です。



院号

生前に一寺を建立するほど寺院に尽くしたり、社会的に高い貢献をした人に付けられます。



道号

戒名の上につけられる名前ですが、号とか字(あざな)に相当するものです。

戒名

本来はこの2つの戒名の意味に相当する部分。俗名(生前)の名前から一字とって入れることが多いです。

位号

戒名の下につけられる位の意味では昔は階級を表していました。性別、年齢なども位号であらわされます。

一般的でもっとも多い名称 【例】▲▲◆◆信士(信女) 6文字  
特に信仰心が篤い者 【例】▲▲◆◆居士(大姉) 6文字  
一般的な戒名の最高位 【例】●●院▲▲◆◆居士(信女) 9文字